

論文

ファーティマ朝第3代カリフ=アル・マンスールの人物像

菟原 卓*

はじめに

ファーティマ朝はシア派の一分派であるイスマーイール派が現在のチュニジアに西暦 909 年に建てた王朝である。その後彼らは北アフリカ全土を征服し、さらに 969 年にはエジプトを征服して本拠をそちらに移し、シリアやアラビア半島にも勢力を拡大した。この王朝は少数派にすぎないにもかかわらず、当時のイスラム世界の中心部で、その命脈を 1171 年までの長きにわたって保った。その理由のひとつとして前半期の君主の多くが英主であったことをあげてもよいだろう。初代カリフ=マフディー（在位 297–322 / 909–934 年¹）から第 5 代アズィーズ（在位 365–386 / 975–996 年）までのカリフは粒ぞろいであり、奇矯な行動と非ムスリムの迫害で有名な第 6 代ハーキム（在位 386–411 / 996–1021 年）も決して凡庸ではなかった²。とくにエジプト征服前の北アフリカ時代のカリフは、君主としてのリーダーシップが強く、いわばファーティマ朝史の主役であった。

したがって初期のカリフについての考察を深めることはファーティマ朝史の理解にとって有益なことである。そこで私は以前に、ファーティマ朝で最も傑出したカリフと言ってもよい第 4 代カリフ=ムイッズ（在位 341–365 / 953–975 年）の人物像について論じたことがある³。ところがその後、実はムイッズの父親である第 3 代カリフ=マンスール（在位 334–341 / 946–953 年）は、私が思っていた以上の極めて優れた君主であり、彼なしにはファーティマ朝の発展はおろか存続すらも危ぶまれるほどの人物であったことに気づかされた。むろん先行研究においてもマンスールの人物像については触れられている。しかし諸史料の記述を体系的に整理して、彼の人物像を明確に把握するという点ではものたりない感がある。また在位期間がわずか 7 年と短かったこと也有って、彼に関する本格的なモノグラフもない⁴。以上に鑑み、本稿では、マンスールの人物像を諸史料から抽出し、整理し系統立てて把

* 東海大学文学部アジア文明学科

握しようと思う。それによってマンスールというカリフの存在がファーティマ朝興隆の一つの要因であったことがより明瞭に理解されるであろう。

I 個人的資質

(1) 軍事的資質

マンスールに備わっていた優れた軍事的資質は、治世初期におけるアブー・ヤズィードの乱の鎮圧過程で遺憾なく発揮された。第2代カリフ=アル・カイム（在位322—334 / 934—946年）時代に始まったこのハワーリジュ派の反乱は、一時ファーティマ朝を滅亡の危機に陥れるほどであった。まずは反乱の推移を整理しておく⁵。

316(928)年以降：アブー・ヤズィードは公然と反ファーティマ朝運動を展開。

332(944)年：本格的に反乱を開始。根拠地のアウラース山地（現在のアルジェリア北東部）からイフリーキヤ（チュニジアを中心にアルジェリア東部とリビア西部を含む地域）を北東方面に諸都市を落しながら進出。

333年サファル月（944年10月）：イフリーキヤの中心都市カイラワーンを征服。

333年ジュマーダーⅡ月～334年サファル月（945年1月～945年9月）：ファーティマ朝の首都マフディーヤの包囲攻撃。首都は陥落を免れたが、その後もイフリーキヤ東部で激戦が続いた。

334年シャウワール月（946年5月）：カリフ=カイム死亡。アブー・ヤズィードはスーサの攻囲に失敗し、カイラワーンへ退却するも住民に阻まれ入城ははたせず。反対に追討を開始した新カリフ=マンスールはカイラワーンに入城。

334年ズー・ル・カアダ月～335年ムハッラム月（946年6月～8月）：カイラワーンの攻防。アブー・ヤズィード軍は撃退され、西方に退却。

335年ラビーⅠ月（946年10月）：マンスールはカイラワーンを発ってアブー・ヤズィードの追撃を開始。

335年ジュマーダーⅠ月～335年ラマダーン月（946年12月～947年3月）：マンスールは幾度かアブー・ヤズィード軍を破る。アブー・ヤズィードはキヤーナの砦（アルジェリア北東部ホドナ山地の北方）に退却。

335年シャウワール月（947年4月）：マンスールはキヤーナの砦を攻囲。

336年ムハッラム月（947年8月）：キヤーナの砦陥落。アブー・ヤズィードは捕縛

され、戦傷がもとで死亡。

336年ジュマーダーⅡ月（948年1月）マンスールは新都マンスリーヤに凱旋。

マンスールは即位直後から反乱の鎮圧に乗り出し陣頭指揮にあたった。しかも彼はしばしば最前線に立って自ら剣をふるって戦ったと伝えられる。その事情をもっとも詳しく記録しているのは、イエメンのイスマーイール派の教宣長官であった Idrīs 'Imād al-Dīn (872 / 1468年没) の *'Uyūn al-Akhbār* であるとされる。Halm の考証によれば、この史料はその著作年代の遅さにもかかわらず、アブー・ヤズィードの乱についての目撃情報に基づいた原典史料をもつともよく保存しているという。記述が目撃情報とされるのは、非常に瑣末なことまで記録しているため、それは原著者がその場にいあわせていたからにはかならないというわけである。その目撃者とは、Ahmad b. Muḥammad b. 'Umar b. 'Abdallāh al-Marwarrūdhī であると推測されている。彼はファーティマ朝軍担当の法官だったので、マンスールの出征に従軍していたと考えられる⁶。まずは、この史料に反映されるマンスールの武人としての資質を確認してみたい。

反乱鎮圧の過程は、カイラワーンの攻防戦、西方への追撃戦、キヤーナ砦付近の最終局面の三段階にわけができる。

334年ズー・ル・カアダ月1日（946年6月3日）マンスールはカイラワーン郊外に塹壕掘りを命じた。しかし軍の主だった者たちは、臆病と思われるとして、これを嫌った。それに対しマンスールは、「御先祖の預言者は塹壕を掘り、防備を固められた。我らはその行為を模倣し、その事跡を追う最初の者なのだ」と言って自ら掘り始めた。そこで人々は真剣に塹壕を掘り始め、作業は昼夜続いた⁷。これはもちろんムハンマドとメッカとの「塹壕の戦い」の故事にならったものである。ズー・ル・カアダ月3日（6月5日）アブー・ヤズィードは全軍で攻撃をかけた。以下その概況である。

カリフの天幕付近が急襲され、激戦となった。マンスールは騎乗し、先祖伝來の剣 Dhū al-Fiqār をふるって獅子のように戦った。カリフの頭上にはパラソル（mizalla）⁸が旗のようにたてられていた。騎兵の大軍が攻撃してきた。カリフは彼らの強者を打ち倒した。味方は500騎を数えたが、敵は30,000かそれ以上だった。味方の多くがカイラワーン城内に逃げ帰り、マンスールは20騎のみを従えて陣に残った。アブー・ヤズィードとその警備兵や勇士がマンスールに近づいた。マンスールは Dhū al-Fiqār を携えてアブー・ヤズィードの方へ向か

った。パラソル持ちの奴隸は、カリフの居場所を隠そうとして、パラソルを下がた。カリフは叱って言う「こやつ、パラソルを挙げよ。恐れるな。おびえるな。まことに神は破られることなき約束を我らになされた。」そしてアブー・ヤズィードに近づき、*Dhū al-Fiqr* をふるって戦った。カリフの剣はアブー・ヤズィードの頭をほとんど打ちかけた。恐れをなしたアブー・ヤズィード軍は退却を始めた。逃げていたファーティマ朝軍兵士は戦場のカリフのもとに戻ってきた。カリフは彼らの臆病をとがめたが、微笑んでおり、「我が袖に入れ」と言った。兵士たちは恥じ入った。逃げた兵士たちはマンスールがそれまでに実戦を経験したことがないのを知っていた。それで彼らはマンスールの敵に対する攻撃を喜んだのである〔要約〕⁹。

この他に、カイラワーンの攻防においてカリフが自ら白兵戦に及んだ合戦の日付としては、334年ズー・ル・ヒッジャ月15日（946年7月17日）、同月21日（7月23日）、335年ムハッラム月5日（946年8月7日）、同月13日（8月15日）等をあげることができる¹⁰。

西方への追討戦においてもマンスールはしばしば最前線に立った。彼が白刃をふるったとされる合戦の日付だけあげておく¹¹：335年ジュマーダーI月13日（946年12月9日）、同月15日（12月11日）¹²、335年シャーバーン月10日（947年3月6日）、335年ラマダーン月2日（947年3月27日）。

反乱鎮圧の最終局面であるキヤーナの砦の攻防も塹壕掘りで始まった。ただし今回は攻囲する側の陣地としての塹壕である。335年シャウワール月5日（947年4月29日）、マンスールは塹壕掘りを命じ、率先してつるはしを手にした。この時には敵の砦の麓にあったオリーブと果樹の林を伐らせている。こうした林の伐採はその後の戦いの中でもおこなわれており、敵には痛手であった¹³。335年シャウワール月11日（947年5月5日）からズー・ル・カアダ月16日（6月8日）にかけては頻繁に戦闘がおこなわれた。マンスールが剣をふるう場面は見られないが、ズー・ル・カアダ16日には弓で二人を射殺している¹⁴。最終決戦は336年ムハッラム月22日（947年8月13日）から24日にかけておこなわれた。この時マンスールは兵士1人あたり200ディルハムを支給した。これは兵士にとって戦いへのインセンティブになったという。激戦が続き、24日にはマンスール自らも戦闘に参加した。乱戦のさなかにマンスールは孤立し、上着や鎧を敵につかまれるほどであったが、体勢を立て直して反撃し、敵は逃走したという。この後マンスールは兵士を激励して荒れ地を攻め登らせ、キヤーナの砦は陥落した¹⁵。

さて以上の記述は、おそらく従軍法官の陣中日誌に基づくものである。これを見る限りマンスールの武勇は傑出している。ただし、それはあくまでもファーティマ朝側の記録であり、内容には誇張もあるにちがいない。どこまで信用してよいか疑問に思われるところもある。それでも、マンスールが陣頭指揮をとる勇敢な武人的君主であったことは認めてよいのではないだろうか。武勇以外の軍略的資質については、証明が難しい。塹壕作戦や果樹の伐採はマンスールの戦術眼の良さを示すものかもしれない。ただ、これらの戦術も含めて、マンスールの行動が戦争において考えられる作戦行動のレベルを大きく超えるということもできず、彼の武略がとくに傑出していたと主張する根拠にはしにくい。それよりもむしろ、自立心旺盛なクターマ族の軍隊を率いて1年以上に亘って転戦し、大反乱を鎮圧した事実こそマンスールの卓越した統率力を物語るものであろう。

結論的に言えば、マンスールは勇気と統率力を兼ね備えた傑出した軍事的指揮官であったことは間違いないといえるのではないか。

(2) 知的資質

マンスールが身につけていた素養と機知について、アイユーブ朝時代に書かれたファーティマ朝の年代記は、*Abū Ja`far Ahmad b. Muḥammad al-Marwarrūdhī*（アブー・ヤズィードの乱の記録を残したと推定されるマルワッルーズィー）を引用して、およそ次のように述べる。

マンスールがアブー・ヤズィードを破った最終決戦に出陣した時、マルワッルーズィーも側にいた。馬上のカリフは2本の槍を携えていたが、その1本を取り落とした。それを見たマルワッルーズィーは、杖にまつわるアラブの古詩を引用し、槍を杖にたとえることによって、その場をとりつくろった。それを聞いたカリフは、「汝はそれよりも良く、より適切なことが言えないのか」と言った上で、モーセの杖にまつわるコーランの数節を引用したという¹⁶。この記述によれば、マンスールは、凶兆となりかねない不測の事態に際しても、たちどころに適切なコーランの文言を引用してその場をきりぬけるだけの素養と機知を備えていたわけである。後にも触れるように、マンスールはフトウバ（金曜礼拝や祭礼時の説教）の名手であった。フトウバにはコーランの引用が満ちていることを考えれば、マンスールがコーランの文言を自家薬籠中のものとしていたことも当然であろう。

マンスールの学識については、息子の第4代カリフ＝ムイッズによる以下の回想も

参考になる。

マンスール——神よ、彼の魂を聖別したまえ——は、イルム（神学的知識）やヒクマ（哲学的叡知）について何か私に教えた時には、時々私に言ったものである。「それについて私に言い返せ、それについて、またその意味について私に聞え、私と議論せよ、私に反論せよ、そしてお前が理解できないことを私に示せ。（後略）」それで私はそのようにしていた。すると、イルムとヒクマの海から、私が考えもしなかつたことが私に流れ込んでくるのである¹⁷。

これは、カリフ自身による後継者育成の場面であるが、マンスールが深い学識の持ち主であったことをも示している。

さらにマンスールは著述家でもあった。彼が執筆に没頭する姿を息子のムイッズは次のように回想している。ある炎暑の日、ムイッズはマンスールが庭園の樹下にいるのを見た。マンスールはターバンをつけず、剃った頭をむきだしにしていた。その頭からは汗がしたたっていた。その時マンスールは手すから本を書いていた。ムイッズは、「我が主よ、このような暑熱の中です。御座所に行かれてはいかがです。」と言った。これに対しマンスールは、「すておけ、私の頭に浮かんでいたものをお前の言葉が断ち切ってしまった。かような次第で（=頭に浮かぶ思考を見失わないとために）、私は座ってこの暑熱に耐えていたのだ。」と言った¹⁸。

マンスールが著述家であったことは、彼自身のムイッズにあてた手紙からも知れる。その手紙の写しは、第2代カリフ＝カーアイムからムイッズ治世にかけて宰相的な立場にあった宦官のジャウザルが保存していた。その中でマンスールは、自身のカリフ位の正当性に関して自らものした書物について言及している¹⁹。これとは別に、実際に現在も写本として伝わっているのが *Tathbit al-Imāma*（『イマーム位の確証』）である。この写本は、近年 Madelung によって初めてその内容が吟味された。それによると、本書はスンナ派のウラマー（学者）とのディベートに勝つための参考書である。マンスールは、ムハンマドの後継者としてのアリーの絶対的な優位性とその子孫であるファーティマ朝カリフの神授の権威を詳細に論じている²⁰。

マンスールの学識は父祖からの薰陶によるものが大きかったと思われる。息子のムイッズが伝えるマンスールの回想には以下のようなものがある。

ある時初代カリフのマフディーは孫のマンスールに一冊の大部分な本を与えた。マフディーは「これは高貴な医学の書である。それをよく読み、誰にも知らないように保管せよ」と命じた。本を受け取ったマンスールは自分の居所に戻ってそれを読み始めたが、内容は「内奥の知識（‘ilm al-bāṭin）」²¹に関するもの

であった。マンスールは当時「内奥の知識」をわきまえていなかったので困惑した。彼はその書物をあくまでも医学書だと思いながら、二日二晩読み続けたがやはり、「内奥の知識」のことしか書いていなかった。次の日マンスールがマフディーに医学のことは何も書いていなかったと告げると、マフディーは次のように答えた。「それは、真実の医学である。それは来世の住処にとどまる者の魂の医学である。それによって魂の痛みは癒され、その病は治療されるのである。(中略) その本をよく読み、その意味を知り、その根本を記憶にとどめよ。そこには、高貴な知識の根本がある。お前がそれを覚えれば、その知識は確実なものになる。そして私が別な書物をお前に与えるまで、その本に専念せよ。」

〔要約〕²²

これはマンスールの年齢が十代の頃のことであろう²³。彼が若年の頃より勉学にいそしんだことをうかがわせるエピソードである。ムイッズはマンスールの知性の性向をうかがわせる次の回想も残している。

アル・マンスール・ビッラーは占星術 (*al-najama*) について語った。彼はその知識に精通していた。彼は私(ムイッズ)に言った：まことに私は、人々が信じる御告げのようなもののために、それを探求し、学んだのではない。かつて反乱の日々に、その終結に至るまで、私は自分が託された戦さの場に立った。そして私は、占星術 (*'ilm al-nujūm*) に基づく知識が選んだ場所に陣取ることは決してなかった。しばしば、なすべきことは、我が心に浮かんでおり、私の気を引いた。一方、星の御告げは、それとは違っており、それを否定していた。そこで私は、その御告げを無視し、それを考慮しなかった。そして私は、私の心に浮かび、私の気を引いたことをなした。その中にこそ成功と勝利があり、星の言の求めるものとは正反対であった。まことに私がこの知識を探求するのは、御言葉のいと高き神の唯一性と被造物に対する神の叡知の作用について、それが我らに示すものためだけである。したがってお前は、これ以外に心をとらわれたり、顔を向けたりしないように注意せよ²⁴。

マンスールが冷徹な合理主義者であったことを彷彿させるエピソードである。

マンスールの才能はスンナ派史料も認めるところである。たとえば、ファーティマ朝に関する古い史料を伝える *Ibn Hammād* (628 / 1231 年没) は、マンスールについて「彼は勇敢かつ豪胆で、雄弁であり、正則アラビア語に熟達していた。彼はフトゥバ(説教)を即座に創作した」と述べる²⁵。簡単な論評であるが、これはむしろ、マンスールの雄弁とフトゥバの才が特に際立っていたことを示しているように

思われる²⁶。フトゥバは通常の金曜礼拝時のものと、二大祭（断食明け祭と犠牲祭）時のものに分けられる。ファーティマ朝カリフが自らおこなったのは、主として二大祭に際してのフトゥバである²⁷。そして Walker の研究によれば、ファーティマ朝直接支配下における金曜のフトゥバの文言が全く記録に残っていないのに対し、カリフのおこなったものは史書中に転載されて 12 通残されている²⁸。これは説教師のおこなう金曜フトゥバが、たいてい即興でおこなわれたのに対し、カリフのフトゥバの中には、書き下された文書に基づくものがあったためであると考えられている。カリフ自身による説教の文書はきわめて貴重なものなので、書写されて記録が残されたのである。もっとも、カリフがフトゥバの文書を残すことも稀なことではあった²⁹。

さて、その 12 通のうち実に 6 通がマンスールによるものである。これはやはりマンスールのフトゥバが、同時代ばかりでなく後世の人々にとっても高く評価されていて証左といえるのではないだろうか³⁰。イスラム社会全体に対して公開されるフトゥバにはそれ相応の高い修辞的技法や宗教的知識が要求される。それを「即座に創作した」と伝えられるマンスールの才能はやはり特筆されるべき卓越したものであったのだろう。

以上を総合して簡明に表現すれば、マンスールの知的資質については以下のようと言える。彼は宗教的識見に富んだ一流の学者であり、冷徹な合理主義者でもあった。そして卓越した雄弁の持ち主であった。

II イマーム（カリフ）としての在り様

この章では、マンスールがどのような意識と態度で治世に臨んだかを見てみたい。

（1）イマームとしての使命・立場の自覚

まずマンスール自身の述懐を紹介しよう。彼が側近の宦官ジャウザルにあてた書状中には以下のようにある：

人々は皆知っておろう。余が若年の頃より家族と子供を持つまで、一介の修道士のごとく、現世をかれりみず、俗世の楽しみを捨て去っていたことを。家族を得てからというものは、余は正当の範囲内で商業に従事した。家族と子供に対する余の恩恵と恩寵がいかなるものであったか、彼らに聞くがよい。まこ

とに彼らは、ふんだんに与えられながら、際限なく過度に得るまで満足しなかったものである。ところで彼らは、余がイマーム位とカリフ位に就いた後には、余のおかげで慣れ親しんでいた厚遇を失って窮することになった。それは、余が商業および家族と子供が慣れきっていたやり方から離れて、人類のために重荷を担うことに専念したためである³¹。

彼の独身時代以来のライフスタイルが垣間みえる興味深い述懐である。本稿の趣旨に関しては、彼がイマーム（カリフ）として「人類のために重荷を担う」気概を持っていましたことを確認しておきたい。同様のことは息子のムイッズも伝えている：

神が彼（マンスール）をイマーム位にお掛けになると、彼はウンマ（イスラム共同体）のことに関心を捧げ、我々や彼自身のことを顧みなくなつた。そして、彼が我々に慣れさせていたもの、また彼自身慣れていたものの多くを減じた。そこで、それを苦に感じたある依存者（被扶養者）がカリフに言った。「以前あなたがイマームになられる前、我々がおかげでいた状態にもどれればなあ！」と。するとマンスールは言った。「あの頃はお前たちだけのことにかかずらわつておればよかった。ところが今日、余は全ウンマのことを案じなければならぬのだ。」³²

マンスールがイマームとしての使命や立場を強く自覚していたことは、彼自身によるフトウバの文言中に読み取ることができる。たとえば、キヤーナの砦の攻囲中に迎えた 335 年ズー・ル・ヒッジャ月 10 日の犠牲祭（947 年 7 月 2 日）のフトウバには以下のようにある：

あなた（神）はそれ（神の代理の地位）に、正しく導かれた私の父祖、すなわち選ばれし高貴な者にして正しく導かれたカリフたちの 1 人また 1 人を選びました。それから、あなたは私に彼らの地位を継がせ、私を通じて彼らの記憶をよみがえらせ、私によって彼らの命令を全きものとし、私に彼らの足跡をたどらせました。そして、あなたが彼らに任せたもの、すなわち我らを通じてのあなたの創造行為の論証、あなたの命令の遂行、あなたの宗教の支持、あなたの使徒の宗教の強化に私を任せました³³。

このような「私」を強調した使命の自覚は他のフトウバの中にも見られる。マフディーヤにおける 336 年シャウワール月 1 日（948 年 4 月 14 日）の断食明け祭に際しての文言には以下のようにある：

神よ。まことに私はあなたの僕です。あなたは私を選び、私をよしとされました。そして、あなたの誠実な友の立場、あなたに近しき者の代理の地位を私

に受け継がせることによって、私に栄誉を与えられました。（中略）また、あなたを除いては誰にも、私に対する力をお与えになりませんでした。そして、あなたの真理の復興、あなたの創造のあかしのために私を任命されました。まことに、私は真理しか語らず、真実しか述べない³⁴。

以上のようなイマームとしての使命の自覚と同時に、マンスールは自分の立場が特別なものである自負も隠そうとはしない。マフディーヤにおける 336 年の犠牲祭（948 年 6 月 21 日）のフトゥバには：

神よ。まことに私はあなたの僕にして、あなたの友です。あなたは私に特恵を与え、それゆえ私は卓越しています。あなたは私を強化し、それゆえ私は力強い。私はあなたによって強大ですが、あなたには従順です。あなたの厚遇によって高貴ですが、あなたによる称揚に対しては謙虚です。あなたのお力のおかげで尊重されますが、あなたの無限力に対しては服従します³⁵。以上総じて、マンスール自身の言葉の中に、彼がイマーム（イスラム共同体の最高指導者）、カリフ（神の代理、信徒の長）としての使命と立場を明確に自覚し、それを標榜していたことが示されている。

（2）教導者として

イマーム（カリフ）は最高の教導者であった。ファーティマ朝では、バーティン（内奥の教義）に関する教学集会（majlis al-hikma 「叡知の集会」）を定期的に宮殿で開いていたが、そこで教宣官が教える内容は、あらかじめカリフによって認可されねばならなかった。王朝初期の代表的学者であるヌウマーンも承認を得るために、自分の講義ノートをマンスールに提示していた。イマームこそが叡知の源だったわけである³⁶。先にマンスールが著述家でもあったと述べたが、それは彼がイマームの責務として信者に宗教的導きを提供しようとした姿でもあった。前の章で紹介した *Tathbīt al-Imāma* (『イマーム位の確証』) 以外にも、マンスールは法に関する著作をしたことが知られている。その著作そのものは失われ、一部が別な写本に引用されて残っているにすぎないが、これはおそらくファーティマ朝における最初の公認の法規範であったとされる³⁷。

これらの高踏的な教導ばかりでなく、カリフはフトゥバの中で、きわめて具体的な教示もしている。336 年の犠牲祭（948 年 6 月 21 日）では、犠牲の捧げ方について次のように述べている：

草食動物のうちで〔犠牲として〕最もよいものは、牝ラクダ、牝牛、牡羊である。若い山羊を犠牲とする者は報われず、若い羊〔を犠牲とする者〕は報われる。礼拝の前に屠られたものはすべて合法な肉であり、礼拝の後のものは認められる犠牲である。完全な犠牲獸は目や耳の健全なものである。病気のものや、奇形のもの、すなわち四肢が多すぎたり欠損しているものは避けよ。刃はよく砥ぎ、屠るにあたっては動物を丁重に扱え³⁸。

336年の断食明け祭（948年4月14日）においては、喜捨について教示する：

お前たちの施し、つまりお前たちの断食の喜捨（ザカート）をなすことによって、お前たちのこの日に神に近づけ。それは諸預言者の長たるお前たちの預言者——神よ、彼とその家族を祝福し救済したまえ——の慣行（スンナ）である。お前たちの各々自身のため、またその家族の各々——男も女も年少者も年長者も——のために、小麦を半サー³⁹ア、または大麦を1サー^ア、あるいはナツメヤシを1サー^ア、他からではなく、お前たちの家計内の食事から〔提供せよ。〕それ以外には受け入れられない⁴⁰。

祝祭のフトウバで犠牲や喜捨の規定を述べるのは、スンナ派にも共通する慣行である⁴¹。それでも、カリフ自らこれらを教示することによって、信徒に対する教導者としての印象づけの効果は一層高まったのではないだろうか。

最後に341年の犠牲祭（953年4月28日）におけるムイッズのフトウバから、マンスールの教導者としての姿を示す文言を引用しよう。このフトウバで父の死去を公表したムイッズは聴衆に語りかける：

お前たちは諸イマームの長、ウンマ（イスラム共同体）の羊飼い、暗闇のランプをまのあたりにしたのである。住まいにおいて聖所において、彼は主が彼に課した義務を履行し、彼の祖父⁴²ムハンマドが彼に託したものを作成し遂げた。そして彼（ムハンマド）の示した慣行（スンナ）から以下のことをお前たちに明らかにした。すなわち、お前たちがそれにならえば、道に迷わず、お前たちの手が神の慈愛から離れることなく、また最もまっすぐな道を歩み、最も偉大な導きに従うことにおいて、お前たちの視覚が曇ることのないことを⁴³。

このフトウバの別な箇所には、マンスールを「高潔な諸イマーム——正しく導かれし者のガイド——の知識の海」、「正しき導きのランプ」、「暗夜を照らす者」と表現する文言もあり⁴⁴、信徒の先頭に立って、彼らを過たず導く教導者としてのイメージを表現している。

(3) 支配者としての自信および威光・権力の誇示

アブー・ヤズィードの乱を平定したマンスールは支配者としての自信を自覚したようである。それを最もよく示すのが新都マンスリーヤの造営である。335年(946年)、アブー・ヤズィード追討に出る前に、マンスールはカイラワーン南郊の軍営地に新都建設命令を発した。新都は正式にはマンスリーヤと命名されたが、地元住民の間では立地場所の元来の名称である *Şabra* の呼び名の方が根付いた。337年ラビーI月(948年9月)、マンスールは、皇太子(後のカリフ=ムイッズ)、主だった家臣、家族をつれて新都に移転した。この後、361年シャウワール月(972年8月)にムイッズがエジプトに向けて出発するまで、マンスリーヤがファーティマ朝の都であった⁴⁵。

マンスリーヤについての史料記述は意外に乏しい。Ibn Hammādによれば：

その城壁は突き固めた粘土(*tawābī*)で築かれ、四つの城門が置かれた。南門、東門——それはザウィーラ門と呼ばれた——、北門——それはクターマ門と呼ばれた——、西門——それはフトゥーフ門と呼ばれた——。そこ(フトゥーフ門)から彼(マンスール)は出陣していた。城門には、鉄で覆われた門扉が設置された。アブー・ヤズィードの事が終わるまでは、それ以上は建造されなかった。その後、そびえたつ諸宮殿、壮大な建物が築かれ、すばらしい植物が植えられ、勢いのある水が引き入れられた⁴⁶。

10世紀末の Muqaddasī の地理書によれば：

それはカップのような円形で、同様のものは他に見当たらない。またマディーナ・アッサラーム(バグダード)のように中央に君主の居館がある。そして水が町の中を流れる。建物が密集しており、すばらしい市場があり、そのかたわらに君主のモスクがある。城壁の幅は 12 腕尺(約 7~8m)で、城壁と町の建物との間は、大通りの幅分へだてられている。カイラワーンから商人たちがエジプト・ロバに乗って朝夕往来している。城門は、フトゥーフ門、ザウィーラ門、ワーディー・アッカサリーン門であり、すべて鉄で覆われている。また城壁は石灰で固着された焼成レンガである⁴⁷。

以上の記述には異同もあるが、この都の大きな特徴は、円形の城壁と街中にひきいれられた水であろう。実際に現代の考古学的調査や空撮によれば、直径 750 メートルの円形の城壁跡と、いくつかの円形や長方形の池跡が確認されている。ただし現在ではこれ以上の構造物は全く残っていない⁴⁸。

宮殿を中心とした円城のプランはアッバース朝カリフ＝マンスール（在位 136—158 / 754—775 年）の造営したバグダードと同じである。つまりファーティマ朝のカリフは奇しくも自分と同じ即位名を持つ仇敵の首都を模倣したことになる。これを Halm はファーティマ朝のカリフ権の正統性の強調と解しているが、Bloom は仇敵の都をモデルにしたことには、懷疑的である⁴⁹。マンスール自身の心中は計りがたい。都市内の水流について Bloom は、贅沢な水のディスプレイであり、カリフ個人の楽しみを主眼としていると解釈している⁵⁰。しかし贅沢な水流は、豊かな植生とあわせて、イスラム教徒が心に抱く天国の楽園を彷彿させる意図があったと考える方が自然だと思われる。それは神の代理としてのカリフが地上に天国を現出させるパフォーマンスであり、神権君主の威光を目の当たりにさせることが意図されていたのであろう。そもそも何よりも新都の立地こそマンスールの自信の表れを示すものである。旧都マフディーヤは半島の上に立地し、海と城壁で周囲を固めた防御主眼の都市であった。これに対しマンスールは、イフリーキヤの中心都市でスンナ派の牙城ともいいくべきカイラワーン近くの平地に都を築いたのである⁵¹。反乱の脅威を克服したマンスールは、その後の王朝発展のために、北アフリカの政治・経済・文化の中心に本拠を構える意義を見出し、それを実行できる確信を得たのであろう。

マンスールは自らの威光と権力を意識的に誇示しようとする君主でもあった。それはビザンツ皇帝から贈り物を携えた使節が来た時の彼の対応の中に明確に示されている。マンスールの腹心ジャウザルの伝記によれば、マンスールは「その贈り物をしのぐより良いものを使節に持たせて帰らせることを欲した。」そこで彼は、旧都マフディーヤで宝物庫の管理にあたっていたジャウザルに対し、「皇帝たちに贈ることがふさわしいもののうちから、彼（マンスール）が指示するもの」を自らのもとに送るよう命じた⁵²。その命令書はジャウザル自身によって保管されていたので、その一部が彼の伝記に逐語的に引用されている。マンスールは次のように言う：

この世で我らが所有し、我らの宝物庫にあるものより良いものがないように
という汝の望みを余は知っている。それをおれに送りよこせと命じた今回のこと
で、汝がキリスト教徒に対して吝嗇になるのではないかと余は案じる。しかし、
そうあってはならない。まことに世界の宝物は、いまだ世界に残っている。
我らがそれを蓄えるのは、敵と競うためであり、また、人々が隠し誰もが吝嗇
になるもの（すなわち貴重な宝物）を通じて、我らの精神の高潔さ、我らの意
図の高邁さ、我らの心の寛大さを示すためである。

ここでマンスールはジャウザルに対して、ビザンツ皇帝への贈答用に貴重な宝物を

惜しみなく蔵から搬出せよと命じているのである。むろんその目的は、豪勢な贈答を通じて、自らの比類なき権力と威光を誇示することである⁵³。イスマーイール派イマームとしてのファーティマ朝カリフの第一の存在理由は、信徒の精神的救済と教導である。しかし北アフリカの霸者として、後ウマイヤ朝やビザンツ帝国の君主と伍しつつあったマンスールは、物質的にもその威光と権力を誇示する君主だったのである⁵⁴。

むすび

以上述べたマンスールの個人的資質やイマームとしての在り様からみれば、彼は名実ともにカリスマ的支配を標榜しうる英主であったと言えるであろう。むろんファーティマ朝側の史料記述に理想化や誇張がなかったとは言いきれない。しかしイマームが信徒の究極の教導者であったとすれば、自らが理想的君主であることを印象づけようとするパフォーマンスはイマームにとって不可欠なものではなかつたろうか。だとすれば、諸史料の記述は必ずしも現実離れしたものとは言えないだろう⁵⁵。傑出した軍事指揮官であると同時に、イスラム共同体の最高指導者としての使命を自覚し、知的にも宗教的にも実際に信徒を教導できる自信に満ちたカリフの姿は、王朝にとって最高の求心力となりえたであろう。本稿ではマンスールの人物像を浮き彫りにすることが主眼だったので、反乱鎮圧後の内治や外交についてはほとんど触れなかった。それでも、その人物像からだけでも在位わずか7年の彼が「ファーティマ朝の第二の建設者」と目され⁵⁶、また「ファーティマ朝で最も偉大なカリフ」とまで評価される⁵⁷理由がよく理解されるであろう。そしてそのカリフ像は第4代カリフ=ムイッズに受け継がれ、ファーティマ朝は大発展期を迎えるのである。

参考文献

史料

- Ibn Ḥammād. *Akhbār Mu'lūk Banī 'Ubayd wa Sīratī-him*, (ed.) M. Vonderheyden. Alger & Paris, 1927. (仏語表題：*Histoire des Rois 'Obaïdides* のアラビア語テキスト部分。)
- Ibn 'Idhārī. *al-Bayān al-Mughrib*, vol. I, (ed.) G. S. Colin & É. Lévi-Provençal. Beirut, n.d. (Leiden 版, 1948 に基づく。)
- Ibn Zāfir. *Akhbār al-Duwal al-Munqati'a*, (ed.) A. Ferré. Cairo, 1972.

- Idrīs, `Imād al-Dīn. *‘Uyūn al-Akhbār wa Funūn al-Āthār*, vol. V, (ed.) M. Ghālib. Beirut, n.d.
- Idrīs, `Imād al-Dīn. *‘Uyūn al-Akhbār wa Funūn al-Āthār*, (ed.) M. al-Ya`lāwī. Beirut, 1985.
 (刊本表題 : *Ta’rīkh al-Khulafā’ al-Fāṭimiyyin bi al-Maghrib*. 本稿では ‘Uyūn(Y)と略す。)
- al-Jawdhari, Abū `Alī Manṣūr al-`Azīzī. *Sīra al-Ustādh Jawdhari*, (ed.) M. K. Husayn & M. Sha`īra. Cairo, 1954.
- al-Maqrīzī, Taqī al-Dīn. *Itti`az al-Hunafā’ bi-Akhbār al-`imma al-Fāṭimiyyin al-Khulafā’*, vol. I, (ed.) J. al-Dīn al-Shayyāl. Cairo, 1967.
- al-Maqrīzī, Taqī al-Dīn. *Al-Mugaffā’ al-Kabīr*, vol. II, (ed.) M. Ya`lāwī. Beirut, 1991.
- al-Muqaddasī, Shams al-dīn. *Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma`rifat al-Aqālīm*, (ed.) M. J. de Goeje. 2nd ed., Leiden, 1906.
- al-Nu`mān b. Muḥammad, *Al-Majālis wa al-Musāyarāt*, (ed.) al-Ḥabīb al-Faqī, I. Shabbūḥ & M. al-Ya`lāwī. Tunis, 1978.

二次文献

- Bloom, J.M. (2007) *Arts of the City Victorious: Islamic Art and Architecture in Fatimid North Africa and Egypt*. New Haven & London.
- Brett, M. (2001) *The Rise of the Fatimids: The World of the Mediterranean & the Middle East in the Tenth Century CE*. Leiden.
- Canard, M. (1958) *Vie de l'Ustādh Jaudhar*. Alger. (al-Jawdhari, *Sīra al-Ustādh Jawdhari* の仏訳。)
- Dachraoui, F. (1981) *Le Califat Fatimide au Maghreb, 296–362 / 909–973 : Histoire Politique et Institutions*. Tunis.
- Halm, H. (1984) ‘Der Mann auf dem Esel: Der Aufstand des Abū Yazīd gegen die Fatimiden nach einem Augenzeugenbericht,’ *Die Welt des Orients*, 15, pp.144–204.
- Halm, H. (1996) *The Empire of the Mahdi: The Rise of the Fatimids* (Translated from the German by M. Bonner). Leiden.
- Halm, H. (1997) *The Fatimids and their Traditions of Learning*. London.
- Hamdani, S. A. (2006) *Between Revolution and State: The Path to Fatimid Statehood*. London.
- Madelung, W. (2003) ‘A Treatise on the Imamate of the Fatimid Caliph al-Manṣūr bi-

- Allāh,’ in C. F. Robinson (ed.) , *Texts, Documents and Artefacts: Islamic Studies in Honour of D. S. Richards*. Leiden, pp.69–77.
- Tāmir, `A. (1980) *al-Manṣūr bi-llāh*. (*al-Mawsū`a al-Ta’rīkhīyya li-l-Khulafā` al-Fātimīyyin*, 3.) Beirut.
- Sanders, P. (1994) *Ritual, Politics, and the City in Fatimid Cairo*. Albany.
- Vonderheyden, M. (1927) *Histoire des Rois ‘Obaïdides*. Alger & Paris. (Ibn Ḥammād, *Akhbār Muլūk Banī Ubayd wa Sīratī-him* の仏語訳部分。)
- Walker, P. E. (2002) *Exploring an Islamic Empire : Fatimid History and its Sources*. London.
- Walker, P. E. (2009) *Orations of the Fatimid Caliphs : Festival Sermons of the Ismaili Imams*. London.
- The Encyclopaedia of Islam, New Editon*. (EI2と略す。)
『ヨーラン I・II』藤本勝次、伴 康哉、池田 修（訳）中央公論新社, 2006.
- 菟原 卓 (1987) 「al-Majālis wa al-Musāyarāt にみられるファーティマ朝カリフ=アル・ムイッズ」『西南アジア研究』No. 26, pp. 31–44.
- 菟原 卓 (1988) 「『ジャウザルの伝記』にみる初期ファーティマ朝宮廷の内情」『オリエント』31巻2号, pp. 18–33.
- 菟原 卓 (1998) 「ファーティマ朝貴顕の商業活動」『東海大学紀要文学部』69輯, pp. 1–11.
(横組み)
- 菟原 卓 (2010) 「ファーティマ朝国家論」『文明研究』29号, pp. 1–21.

¹ 年代を併記する場合、前者がイスラム暦で後者が西暦を示す。

² ファーティマ朝が長続きした理由全般については、菟原 (2010), 10–12.

³ 菅原 (1987).

⁴ Tāmir (1980)があるが、ファーティマ朝カリフに関する啓蒙的シリーズ中の一書で、注もない小冊子である。

⁵ 反乱の推移のまとめには以下の文献を使用した。Halm (1984), 173–197; Halm (1996), 298–322; Dachraoui (1981), 165–182, 188–203; S. M. Stern, ‘Abū Yazīd,’ EI2; Dachraoui, ‘Al-Ķā’im,’ EI2; Dachraoui, ‘Al-Manṣūr bi’llāh,’ EI2.

⁶ Halm (1984), 146, 172, 201–202. Halm のこの論文は、M. Ghālib の校訂による ‘Uyūn al-Akhbār が非常に間違いが多いので（とくに固有名詞）、それらを訂正しながらアブー・ヤ

-
- ズイードの乱のあらましを時系列にそって整理し解説したものである。現在では *Ya'lāwī* が校訂した刊本（本稿では '*Uyūn(Y)*' として示す）が最善とされるので、私はそれを利用した。
- ⁷ Idrīs, '*Uyūn(Y)*', 359–360; cf. Halm (1984), 172–173.
- ⁸ パラソルはファーティマ朝カリフ権威の表象の一つであった。特にカリフ位の正統な継承権の在りかを示すものとして用いられたようである。Sanders (1994), 25–26.
- ⁹ '*Uyūn(Y)*', 360–362; cf. Halm (1984), 173.
- ¹⁰ '*Uyūn(Y)*', 370, 371–372, 374–375, 376–377; cf. Halm (1984), 176, 177, 178.
- ¹¹ '*Uyūn(Y)*', 395, 400, 408, 413–414; cf. Halm (1984), 182, 183, 186.
- ¹² この 15 日という日付は、'*Uyūn(Y)*' のテキスト欄外に校訂者が「見出し」として記入しているが、Halm (1984), 183 では 20 日になっている。しかし私が見るところ、いずれの日付もテキストの記述から確定することはできない。
- ¹³ '*Uyūn(Y)*', 423, 425; cf. Halm (1984), 188.
- ¹⁴ '*Uyūn(Y)*', 424–427; cf. Halm (1984), 188–189.
- ¹⁵ '*Uyūn(Y)*', 433–436; cf. Halm (1984), 190–192.
- ¹⁶ Ibn Zāfir, 19 (cf. Maqrīzī, *Itti'āz*, I, 88–89.); Halm (1996), 320–321; Halm (1984), 191–192. (Halm (1996), 321 の注 32 で Ibn Zāfir, 13 とあるのは 19 の間違い。) マンスールが引用したのは、モーセがファラオの前で杖を投げて魔法使いたちのまやかしを打ち破った場面（『コーラン』7 章 117–119 節。日本語訳, I, 202.）
- ¹⁷ Nu'mān, *Al-Majālis wa al-Musāyarāt*, 133; 菅原 (1987), 34.
- ¹⁸ *Al-Majālis wa al-Musāyarāt*, 132; Halm (1997), 90.
- ¹⁹ Jawdharī, *Sūra al-Ustādh Jawdhar*, 64; 菅原 (1988), 22. マンスールのカリフ位継承の正当性については、カリフ家一族の中にも疑念を抱く者が存在した。この書物は、それに対する反論を意図したものである。そのタイトルは不明で、現在なんらかの形で伝わっているのかどうかも不明。
- ²⁰ Madelung (2003), 71–77.
- ²¹ バーティン (bāṭin) とはイスマーイール派の用語で、コーランやイスラム法の表面的ではない内奥の真の意味を指す。
- ²² *Al-Majālis wa al-Musāyarāt*, 502–503. Cf. Hamdani (2006), 102.
- ²³ マンスールの生年は、おそらく 301 年 (913 / 914 年) である。Halm (1996), 312. マフディーは 322 年 (934 年) に没している。
- ²⁴ *Al-Majālis wa al-Musāyarāt*, 131–132. Cf. Halm (1997), 86. Halm は *al-najama* を天文学 (astronomy) と訳し、マンスールが占星術 (astrology) を侮蔑していたことを示す証拠としてこの部分の記述をあげている。また、その翻訳もかなり私の翻訳とは異同がある。*al-najama* にせよ *ilm al-nujūm* にせよ、天文学とも占星術とも訳しうる言葉である。また現代とは異なり当時の人々にとっては、占星術は科学であった。私の解釈するところでは、マンスールは天文学と占星術を明確に区別しているわけではなく、星に関する知識を何に用い、何に用いるべきではないかということを述べているように思われる。
- ²⁵ Ibn Ḥammād, 22; Halm (1996), 312; Walker (2009), 13–14. Ibn Ḥammād の著作は、現在では失われてしまった評価の高い年代記や口頭伝承を収録しており、マグリブ時代のファーティマ朝史に関して高い価値を持つとされる。Vonderheyden (1927), Introduction, 9–10. Cf. Walker (2002), 156.
- ²⁶ マンスールの雄弁とフトゥバの才については、以下にも記述がある。Maqrīzī, *Muqaffā*, II, 178; *Itti'āz*, I, 88; Ibn 'Idhārī, I, 218.
- ²⁷ Walker (2009), xi–xii.
- ²⁸ 支配領域外のものでは、401 年ムハッラム月 4 日（1010 年 8 月 18 日）ウカイル朝治下のモスルでおこなわれたファーティマ朝の宗主権を認めるフトゥバの文言が記録されている。Walker (2009), 3, 13.
- ²⁹ Walker (2009), 12–14.

-
- ³⁰ Cf. Walker (2009), 13–14. マンスール以外には、第2代カーム、第4代ムイッズ、第10代アーミル（在位 495–524 / 1101–1130 年）のものがそれぞれ 2 通ずつ残されている。
- ³¹ *Sīra al-Ustādh Jawdhar*, 62; 菅原（1998），5（横組み）。
- ³² *Al-Majālis wa al-Musāyarāt*, 441; 菅原（1998），5（横組み）。
- ³³ Walker (2009), アラビア語テキスト, 21(英訳, 110.) フトウバの出典は、'Uyūn(Y), 428–431; *Muqaffā*, II, 146–148.
- ³⁴ Walker (2009), アラビア語テキスト, 27(英訳, 118.) フトウバの出典は、*Sīra al-Ustādh Jawdhar*, 55–60; 'Uyūn(Y), 480–486; *Muqaffā*, II, 163–168.
- ³⁵ Walker (2009), アラビア語テキスト, 32(英訳, 124.) フトウバの出典は、*Muqaffā* II, 168–172.
- ³⁶ Halm (1997), 28–29.
- ³⁷ Madelung (2003), 70–71.
- ³⁸ Walker (2009), アラビア語テキスト, 29(英訳, 121–122.) 335 年の犠牲祭のフトウバにも同様の文言がある。Walker (2009), アラビア語テキスト, 19(英訳, 108.)
- ³⁹ サーアは乾量の単位で 5 と 1/3 パイントにあたる。Walker (2009), 79, 注 173.
- ⁴⁰ Walker (2009), アラビア語テキスト, 23(英訳, 114.) 335 年の断食明け祭のフトウバにも、ほぼ同様の文言が見られる。Walker (2009), アラビア語テキスト, 15(英訳, 103.) 後者のフトウバの出典は、'Uyūn(Y), 417–421.
- ⁴¹ A. J. Wensinck, 'Khutba,' *EZ2*.
- ⁴² ファーティマ朝のフトウバにおいては、ムハンマドは祖父、アリーは父、ファーティマは母にたとえられる。Walker (2009), 64–67.
- ⁴³ Walker (2009), アラビア語テキスト, 38(英訳, 132.) フトウバの出典は、*Sīra al-Ustādh Jawdhar*, 76–84; 'Uyūn(Y), 541–548.
- ⁴⁴ Walker (2009), アラビア語テキスト, 36(英訳, 129–130.)
- ⁴⁵ Halm (1996), 316, 330, 418; 'Uyūn(Y), 489–490; *Muqaffā*, II, 172.
- ⁴⁶ Ibn Hammād, 23–24; Halm (1996), 342–343.
- ⁴⁷ Muqaddasī, 226; Bloom (2007), 37.
- ⁴⁸ Bloom (2007), 38; Halm (1996), 346. ファーティマ朝のカイロへの遷都後、マンスリー・ヤはファーティマ朝宗主下のズィール朝の本拠となっていたが、445 年（1053 年）に廃都となった。遺構がほとんど残っていないのは、その後にカイラワーン住民による建築資材の調達場にされたことと、くりかえされた洪水のためにあるとされる。
- ⁴⁹ Halm (1997), 13–14; Bloom (2007), 37.
- ⁵⁰ Bloom (2007), 39–40.
- ⁵¹ Bloom (2007), 38.
- ⁵² ジャウザルはカリフの新都への移転後も旧都にとどまっていた。この間の事情については、菅原（1988），25.
- ⁵³ *Sīra al-Ustādh Jawdhar*, 60–61; 'Uyūn(Y), 498–499; Canard (1958), 88–89; Bloom (2007), 41–42; Halm (1996), 332. テキストの拙訳は、Canard および Bloom の翻訳とは若干の異同がある。
- ⁵⁴ Cf. Bloom (2007), 42.
- ⁵⁵ Cf. 菅原（1987），42–43.
- ⁵⁶ Brett (2001), 177.
- ⁵⁷ Tāmir (1980), 79.